

研究紀要青葉 Seiyo 第1巻第1号 2009年(平成21年12月21日)

原 著

青年期男女の男性性・女性性と育児観についての研究

A STUDY OF MASCULINITY AND FEMININITY IN YOUNG ADULT MEN
AND WOMEN AND THEIR VIEWS ON CHILD-REARING

三 國 和 美

Kazumi Mikuni

仙台青葉学院短期大学

青年期男女の男性性・女性性と育児観についての研究

A STUDY OF MASCULINITY AND FEMININITY IN YOUNG ADULT MEN AND WOMEN AND THEIR VIEWS ON CHILD-REARING

三 國 和 美

Kazumi Mikuni

キーワード： アンドロジニー, 男性性, 女性性, ジェンダー・タイプ, 育児観

keywords: Androgyny, Masculinity, Femininity, gender types, child-rearing views

Abstract

Objective : Research was done, with the goal of clarifying the gender types of young adult men and women, and how that relates to their views on child-rearing.

Subjects and Method : An anonymous self-administered questionnaire was given to 652 men and 589 women whose ages ranged from 18 to 29 years old. The questions used were specially drawn up to standardize child-rearing views based on a person's basic attributes and their score on Dohi's androgyny scale. The subjects were classified into four types based on their scores on the androgyny scale. The subjects' scores on child-rearing views were statistically analyzed.

Results : Of the four gender types, for both men and women, the androgynous type was the most represented. Androgynous-type people, with both high masculinity and femininity, scored high for both fatherly child-rearing and motherly child-rearing. This shows a high level of positive interest in child-rearing. However, in all gender types, including androgynous type, men scored high for fatherly child-rearing while women scored high for motherly child-rearing. From this result, we can say that men are oriented toward fatherly child-rearing and women are more oriented toward motherly child-rearing.

要 旨

目的：青年期男女のジェンダー・タイプの現状を明らかにすることと、ジェンダー・タイプと育児観の関連を明らかにすることを目的に研究を行った。

対象と方法：18～29歳の男性652名、女性589名を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。基本的属性、土肥のアンドロジニー・スケール、および独自に作成した育児観尺度からなる質問紙を使用した。アンドロジニー・スケールの得点によって対象を4つのタイプに分類し、育児観得点との関連を統計的に解析した。

結果：ジェンダー・タイプは男女とも両性具有型がもっと多かった。男性性・女性性がともに高い両性具有型は父親的育児観得点・母親的育児観得点の両方が高く、育児に対して積極的な意識を有すると考えられた。しかし両性具有型を含めた全てのジェンダー・タイプにおいて男性は父親的育児観得点が高く、女性は母親的育児観得点が高いことから、男性は父親的育児を志向し、女性は母親的育児を志向していると考えられた。

緒 言

1960年代以降ジェンダー、すなわち社会的、文化的な性という考え方が注目されてきた^{5) 18)}。Bem¹⁶⁾は1974年に個人が女性性と男性性の両方を兼ね備える、あるいは統合するという、心理学的男女両性具有性 (psychological androgyny) の理論を発表した。男性性とは男性にとって社会的に望まれるパーソナリティ特性、つまり男らしさのことであり、女性性とは女性にとって社会的に望まれるパーソナリティ特性、つまり女らしさのことである¹⁾。男女両性具有とは男女に関わらず、男性性と女性性を志向し受容している状態であり、それが心理的健康や社会的適応にとってもっとも理想的であると考えられる理論である¹⁾。

近年、ジェンダーの考え方が注目され、社会においてだけでなく育児においても男女が平等であるべきではないかという考えが広まってきた。1997年汐見¹⁵⁾は父親と母親が父性・母性をもちあわせ、必要なときにその能力を発揮するべきであるという「親性」の概念を発表した。そして、松岡ら¹²⁾は「母性および父性は、親として子どもとかわる上で重要な性質であり、親性のひとつとして、それぞれ異なる機能を有するもの」とし、また「母性および父性は、生物学的性差によらず、男女において存在し、個人の中に共存（具有）する性質である」と述べている。

一方で「父性の喪失」、「母性の喪失」などが話題になり、家庭における父親と母親の在り方が見直されている^{7) 8)}。佐々木¹⁴⁾は父性原理を「子どもたちに社会の文化を伝えるものである。規律、責任、理想、忍耐、役割、主張などのモデルを示すものである。」、母性原理を「子どもをはじめ家族メンバーに、家庭において安らぎやくつろぎを与えるものであろう。」とし、父親は子どもに社会の厳しさを教え、母親は家庭に安らぎを与えるという、そもそも違う役割があるとしている。さらに佐々木¹⁴⁾は「父性原理の機能が子どもたちのために有効に働くのは、そういう母親の母性原理の機能が十分に働いているからである。足して2

で割るやりかたの両親の役割分担では、不幸な子どもたちが増えるばかりであるし、結果として不幸な親子や家族が増えるばかりである。」と述べている。これは、父親が母親の行う育児や家事を平等に分担することを勧め、授乳やおむつ交換などを積極的に行う父親を「よい父親」「よい夫」とし、まるで母親のように優しい父親をつくり出している最近の社会の流れに対して疑問を投げかけている意見であろう。

これらの考えを受けて、育児について男性は父親的育児のみ、女性 は母親的育児のみを行うと限局するべきではないが、男女にはそれぞれの特性を活かした育児役割があるのではないかという仮説を立てた。土肥²⁾が「子に対する女性性（男性性）の部分は母性原理（父性原理）と考えられる。」と述べていることから、育児に関わる性は結婚や子どもをもつ以前から男性性・女性性としてすでに個人の中に形成されているのではないかと考えた。そこで、男性性・女性性の現状を明らかにすることと、育児観（どのような育児を行いたいと思っているか）と男性性・女性性の関連を知ることがを目的とし、「大人への移行期であり、自分なりの独自の性役割観を確立し、近い将来、親としての心理的な準備が整いつつある時期」¹³⁾といわれている青年期男女を対象に、土肥の「アンドロジニー・スケール」¹⁾および独自に作成した育児観尺度をもちいて調査を行った。

対象と方法

I. 対象と調査期間：

東北・関東・近畿・四国で平成13年10月7日から11月15日の期間に無記名自記式質問紙調査を実施した。質問紙を1643名の大学生・専門学校生に配布し、1385名からの回答があった。有効回収数は1281名で、そのうち自己責任能力のある未婚で子どものいない青年期（18～29歳）男女1241名（75.5%）、男性652名、女性589名を解析対象とした。対象の平均年齢は 20.9 ± 0.1 歳（ $m \pm 1SD$ ）、男性 21.2 ± 2.0 歳、女性 20.5 ± 1.7 歳であった。

II. 調査内容

1. 基本的属性：

1) 年齢，2) 性別，3) 所属学部（専門学校分野），4) 父母の有無，5) きょうだい構成

2. アンドロジニー・スケール（表1）：

Bem¹⁶⁾が開発し，土肥¹⁾が改正した個人の中の男性性・女性性を数量的に測る尺度。男性性項目10項目，女性性項目10項目の計20項目で構成されている。「そう思わない」（1点）から「そう思う」（5点）までの5件法で質問し，対象を男女別にその中央値で4型に分類する。①男性性優位型（M型）：男性性得点が中央値以上で女性性得点が中央値以下のもの，②女性性優位型（F型）：男性性得点が中央値以下で女性性得点が中央値以上のもの，③両性具有型（A型）：男性性得点・女性性得点ともに中央値以上のもの，④未分化型（U型）：男性性得点・女性性得点ともに中央値以下のもの。

3. 育児観尺度（表2）：

父親的育児項目10項目，母親的育児項目10項目の計20項目からなる。対象が父親的な育児と母親的な育児のどちらをしたいと思っているかを測定する尺度。松岡ら¹¹⁾の父性度・母性度尺度を参考

に独自に作成した。父親らしいと考えられる育児を父親的育児項目，母親らしいと考えられる育児を母親的育児項目とした。「そう思わない」（1点）から「そう思う」（4点）までの4件法で質問し，父親的育児項目の合計得点を父親的育児得点，母親的育児項目の合計得点を母親的育児得点とした。

III. 分析方法：

統計ソフトはSPSS 10.1 for windowsを使用した。統計検定は男女別，きょうだい構成別のアンドロジニー・スケールの得点，育児得点の平均の差の検定，ジェンダー・タイプ別の育児得点の平均の差の検定はt検定をもちいた。ジェンダー・タイプの父親的育児得点と母親的育児得点の平均の差の検定と学部別のアンドロジニー・スケール得点，育児得点の平均の差の検定は一元配置分散分析を行い，Games-Howell法をもちいて多重比較した。本研究の結果と，先行研究の結果（Bemが1974年に米国でBSRIをもちいて調査した結果，土肥が1990年に大学生を対象に伊藤の性役割測定尺度をもちいて調査した結果，蛭田らが既婚で子どもをもつ男性を対象に土肥のアンドロジニー・スケールをもちいて調査した結果）を χ^2 検定をもちいて比較した。

表1. 対象の背景

	全体（1241名）	男性（652名）	女性（589名）
年齢（ $m \pm 1SD$ ）	20.9 \pm 0.1歳	21.2 \pm 2.0歳	20.5 \pm 1.7歳
所属学部：看護系	144名(11.6%)	7名(1.0%)	137名(23.3%)
医学系	128名(10.3%)	107名(16.4%)	21名(3.6%)
その他医療系	189名(15.2%)	95名(14.6%)	94名(16.0%)
理系	157名(12.7%)	132名(20.2%)	25名(4.2%)
文系	495名(39.9%)	268名(41.1%)	227名(38.5%)
その他	76名(6.1%)	26名(4.0%)	50名(8.5%)
不明	52名(4.2%)	17名(2.6%)	35名(5.9%)
きょうだい：いる	828名(66.7%)	425名(65.2%)	403名(68.4%)
いない	74名(6.0%)	35名(5.4%)	39名(6.6%)
不明	339名(27.3%)	192名(29.4%)	147名(25.0%)

表2. アンドロジニー・スケールの項目

項 目	
男性性項目	自己主張のある 積極的な 自主的な 人に頼らない 行動力のある たくましい 信念を持つ 行動半径の広い 前向きな 独創力のある
女性性項目	やさしい 親切な すなおな 人に暖かい かわい気のある 人に尽くす 同情心のある 気持ちの細やかな 言葉使いの丁寧な 慎重深い

表3. 育児観尺度の項目

項 目	
父親的育児項目	子どもの前で威厳を保つ 子どもが悪いことをしたときに罰を与える 家族の中でリーダーシップをとる 子どもに規則を守らせる 悪いことをしていたら、 自分の子どもも他人の子どもも注意する 子どもの前で泣かない 子どもに道徳を語る 子どもに上下関係を教える 子どもにとって力強い存在である 子どもに感動を与える
母親的育児項目	子どもに添い寝をする 子どもに子守歌を歌う 子どもに頬ずりをする 育児日記をつける 子どもの健康管理をする 子どもにやさしくする 子どもの身の回りの世話をする 子どもを抱きしめる 子どもにとってやわらかい存在である 子どもと一体感を持つ

結 果

I. 対象の背景

1. 所属学部（専門学校の分野）（表1）

看護系が144名（11.6%）、男性：7名、女性：137名であった。医学系が128名（10.3%）、男性：107名、女性：21名であった。その他の医療系が189名（15.2%）、男性：95名、女性：94名であった。理系が157名（12.7%）、男性：132名、女性：25名であった。文系が495名（39.9%）、男性：268名、女性：227名であった。その他の所属は76名（6.1%）、男性：26名、女性：50名、不明は52名（4.2%）、男性：17名、女性：35名であった。

2. きょうだい構成

きょうだいがいないものは男性：35名、女性：39名、合計：74名（6.0%）、であった。きょうだいがいるものは男性：425名、女性：403名、合計：828名（66.7%）、不明は男性：192名、女性：147名、合計：339名（27.3%）であった。

II. アンドロジニー・スケール

1. 男女のアンドロジニー・スケールの得点（表4、図1）

男性の男性性得点の平均は 33.5 ± 0.3 点、女性性得点の平均は 34.3 ± 0.3 点であった。女性の男性性得点の平均は 32.6 ± 0.3 点、女性性得点の平均は 33.1 ± 0.2 点であった。男性の中央値は男性性得点が34.0点、女性性得点が34.0点であった。女性の中央値は男性性得点が33.0点、女性性得点が33.0点であった。男女別に男性性得点の平均と女性性得点の平均を比較すると、男性は女性性得点が男性性得点に比べて有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。女性は、男性性得点と女性性得点に有意差はみられなかった。男性性得点の平均と女性性得点の平均を男女で比較すると、男性性得点の平均、女性性得点の平均ともに男性が女性に比べて有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。

2. 男女のジェンダー・タイプの割合（図2）

ジェンダー・タイプに分類すると、男性はM型116名（17.8%）、F型144名（22.1%）、A型211名（32.4%）、U型181名（27.8%）であった。女

表 4. 背景別にみたアンドロジニー・スケールの得点

	男 性		女 性	
	男性性得点	女性性得点	男性性得点	女性性得点
性 別	33.5±0.3	34.3±0.3	32.6±0.3	33.1±0.2
所属学部				
看護系	34.6±2.2	33.4±2.9	33.0±0.5	32.9±0.5
医学系	32.6±0.6	32.7±0.7	36.8±1.8	35.7±1.6
その他医療系	32.5±0.7	34.7±0.7	32.2±0.6	33.4±0.6
理系	34.1±0.6	33.7±0.6	31.8±1.2	31.0±1.1
文系	34.2±0.5	35.1±0.4	32.8±0.4	33.4±0.4
その他	31.8±1.3	34.1±1.1	31.9±1.0	33.3±0.7
きょうだい				
いる	33.8±0.4	34.4±0.3	32.5±0.3	33.1±0.3
いない	34.0±1.4	34.1±1.3	32.2±1.0	32.8±0.7

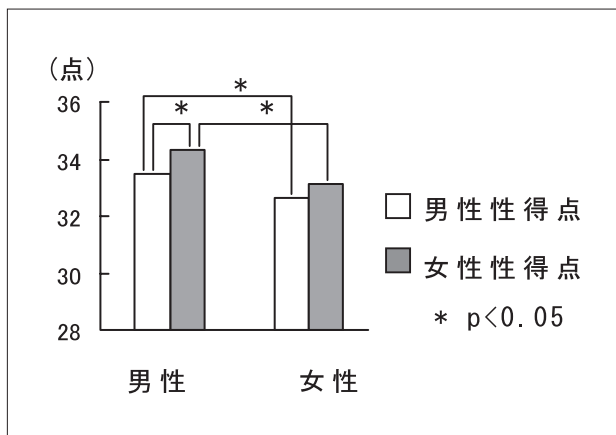


図 1. アンドロジニー・スケールの平均得点

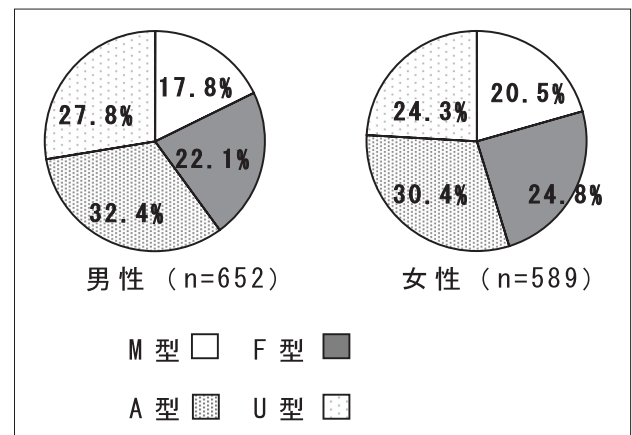


図 2. ジェンダー・タイプの割合

性はM型121名 (20.5%), F型146名 (24.8%), A型179名 (30.4%), U型143名 (24.3%)であった。ジェンダー・タイプの割合は男女に有意な差はみられなかった。

3. 所属学部別のアンドロジニー・スケールの得点

男女とも所属が不明なものを除外して検定をおこなった。

(1) 男性の所属学部別のアンドロジニー・スケールの得点

看護系の男性性得点の平均は34.6±2.2点, 女性性得点の平均は33.4±2.9点であった。医学系の男性性得点の平均は32.6±0.6点, 女性性得点の平均は32.7±0.7点であった。その他医療系に

おける男性性得点の平均は32.5±0.7点, 女性性得点の平均は34.7±0.7点であった。理系の男性性得点の平均は34.1±0.6点, 女性性得点の平均は33.7±0.6点であった。文系の男性性得点の平均は34.2±0.5点, 女性性得点の平均は35.1±0.4点であった。その他の所属における男性性得点の平均は31.8±1.3点, 女性性得点の平均得点は34.1±1.1点であった。男性性得点の平均と女性性得点の平均を所属で比較すると, 男性性得点の平均と女性性得点の平均に有意差はみられなかった。

(2) 女性の所属学部別のアンドロジニー・スケールの得点

看護系の男性性得点の平均は33.0±0.5点, 女性性得点の平均は32.9±0.5点であった。医学系の男性性得点の平均は36.8±1.3点, 女性性得点

の平均は 35.7 ± 1.6 点であった。その他医療系における男性性得点の平均は 32.2 ± 0.6 点、女性性得点の平均は 33.4 ± 0.6 点であった。理系の男性性得点の平均は 31.8 ± 1.2 点、女性性得点の平均は 31.0 ± 1.1 点であった。文系の男性性得点の平均は 32.8 ± 0.4 点、女性性得点の平均は 33.4 ± 0.4 点であった。その他の所属における男性性得点の平均は 31.9 ± 1.0 点、女性性得点の平均得点は 33.3 ± 0.7 点であった。男性性得点の平均と女性性得点の平均を所属で比較すると、男性性得点の平均においては医学系がその他医療系とその他の所属学部比べて有意に高かった ($p < 0.05$)。女性性得点の平均はすべての所属学部で有意差はみられなかった。

4. きょうだい構成別のアンドロジニー・スケールの得点

男女ともきょうだいの構成が不明なものを除外して検定をおこなった。

(1) 男性のきょうだい構成別のアンドロジニー・スケールの得点

きょうだいがいない男性の男性性得点の平均は 34.0 ± 1.4 点、女性性得点の平均は 34.1 ± 1.3 点であった。きょうだいがいる男性の男性性得点の平均は 33.8 ± 0.4 点、女性性得点の平均は 34.4 ± 0.3 点であった。きょうだいがいない男性ときょうだいがいる男性では男性性得点・女性性得点に有意差はみられなかった。

(2) 女性のきょうだい構成別のアンドロジニー・スケールの得点

きょうだいがいない女性の男性性得点の平均は 32.2 ± 1.0 点、女性性得点の平均は 32.8 ± 0.7 点であった。きょうだいがいる女性の男性性得点の平均は 32.5 ± 0.3 点、女性性得点の平均は 33.1 ± 0.3 点であった。きょうだいがいない女性ときょうだいがいる女性では男性性得点・女性性得点に有意差はみられなかった。

Ⅲ. ジェンダー・タイプの割合の先行研究との比較 (図3, 4, 5)

蛭田ら⁹⁾は1999年に土肥のアンドロジニー・スケールをもちいて、既婚で子どもをもつ男性に対して調査をおこなった。ジェンダー・タイプの割合はM型14.7%, F型19.5%, A型31.1%, U型32.6%で、本研究のジェンダー・タイプの割合と比較すると、有意な差はみられなかった。土肥²⁾が1990年に、伊藤のアンドロジニー・スケール(性役割測定尺度)をもちいて、大学生を対象に調査を行った結果、ジェンダー・タイプの割合は男性:M型28.4%, F型16.0%, A型34.6%, U型21.0%, 女性:M型12.5%, F型20.8%, A型32.3%, U型34.4%であった。Bem¹⁶⁾は1974年に独自に作成したBSRIをもちいてStanford大学の学生に調査した。ジェンダー・タイプの割合は男性:M型36.0%, F型6.0%, A型34.0%, ややM型19.0%, ややF型5.0%, 女性:M型8.0%, F型34.0%, A型27.0%, ややM型12.0%, やや

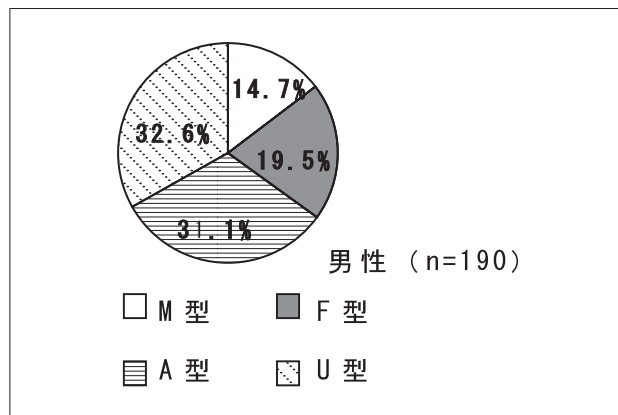


図3. 蛭田らのジェンダー・タイプの割合(1999年)⁹⁾

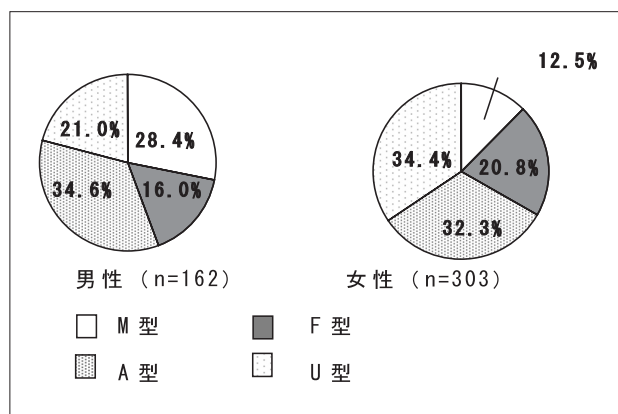


図4. 土肥のジェンダー・タイプの割合(1990年)³⁾

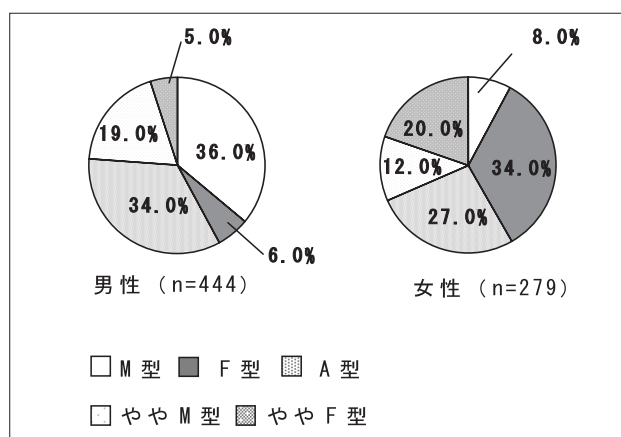


図5. Bemのジェンダー・タイプの割合(1974年)¹⁶⁾

F型20.0%であった。どちらの調査も本研究と使用した尺度は違うが、ジェンダー・タイプの割合を1974年 Bem¹⁶⁾、1990年土肥²⁾、2001年の本研究と経年的にみると、男性におけるF型と女性におけるM型が増加している傾向がみられている。

V. 育児得点 (表5)

1. 独自に作成した育児観尺度の信頼性

クロンバックの α 信頼係数は、父親的育児項目が0.67、母親的育児項目が0.81であった。

2. 男女の育児得点 (図6)

男性の父親的育児得点の平均は 31.6 ± 0.2 点、母親的育児得点の平均は 29.1 ± 0.2 点であった。女性の父親的育児得点の平均は 30.1 ± 0.2 点、母親的育児得点の平均は 33.8 ± 0.2 点であった。男性の父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平均の比較において、父親的育児得点の平均は母親的育児得点の平均に比べて有意に高かった ($p < 0.01$)。女性の父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平均の比較において、母親的育児得点の平均は父親的育児得点に比べて有意に高かった ($p < 0.01$)。父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平均を男女で比較すると、父親的育児得点の平均は女性に比べて男性が有意に高かった ($p < 0.01$)。母親的育児得点の平均は男性に比べて女性が有意に高かった ($p < 0.01$)。

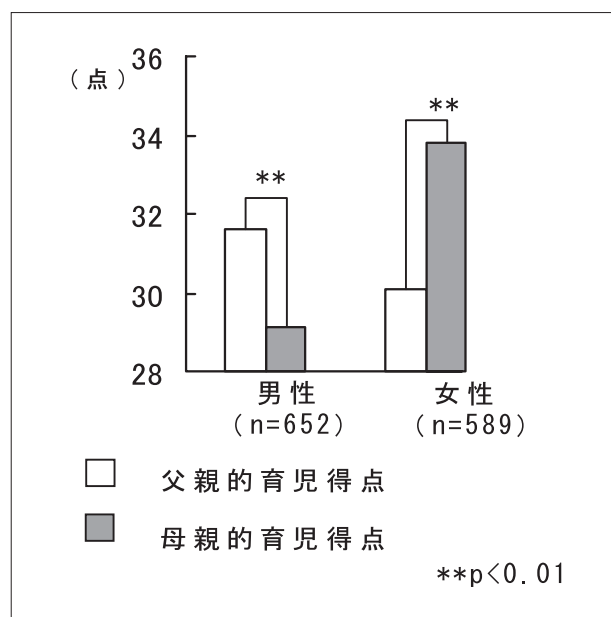


図6. 男女別育児得点の比較

3. ジェンダー・タイプ別の育児得点

(1) 男性のジェンダー・タイプ別の育児得点 (図7)

M型男性の父親的育児得点の平均は 31.5 ± 0.4 点、母親的育児得点の平均は 28.0 ± 0.5 点であった。F型男性の父親的育児得点の平均は 31.1 ± 0.4 点、母親的育児得点の平均は 30.1 ± 0.3 点であった。A型男性の父親的育児得点の平均は 33.4 ± 0.3 点、母親的育児得点の平均は 30.7 ± 0.3 点であった。U型男性の父親的育児得点の平均は 29.9 ± 0.3 点、母親的育児得点の平均は 27.3 ± 0.4 点であった。父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平均をジェンダー・タイプで比較すると、父親的育児得点の平均はA型が他の型に比べて有意に高かった ($p < 0.05$)。母親的育児得点の平均はF型とA型が他の型に比べて有意に高かった ($p < 0.05$)。

(2) 女性のジェンダー・タイプ別の育児得点 (図8)

M型女性の父親的育児得点の平均は 30.3 ± 0.3 点、母親的育児得点の平均は 33.1 ± 0.4 点であった。F型女性の父親的育児得点の平均は 30.1 ± 0.3 点、母親的育児得点の平均は 34.5 ± 0.3 点であった。A型女性の父親的育児得点の平均は 31.1 ± 0.3 点、母親的育児得点の平均は 34.8 ± 0.3 点であった。U型女性の父親的育児得点の平均は 28.9 ± 0.3 点、母親的育児得点の平均は 32.4 ± 0.4 点であった。父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平

均をジェンダー・タイプで比較すると、父親的育児得点の平均はA型が他の3つの型に比べて有意に高かった。母親的育児得点の平均はF型とA型が他の型に比べて有意に高かった ($p<0.05$)。

(3) ジェンダー・タイプ別父親的育児得点と母親的育児得点の比較 (図9)

男性のジェンダー・タイプ別の父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平均を比較すると、すべての型の父親的育児得点の平均が母親的育児得点の平均に比べて有意に高かった ($p<0.05$)。女

性のジェンダー・タイプ別の父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平均を比較すると、すべての型の母親的育児得点の平均が父親的育児得点の平均に比べて有意に高かった ($p<0.01$)。

4. 所属学部 (専門学校分野) 別の育児得点

男女とも所属が不明なものを除外して検定をおこなった。

(1) 男性の学部別育児得点

看護系の父親的育児得点の平均は 30.3 ± 1.7 点、

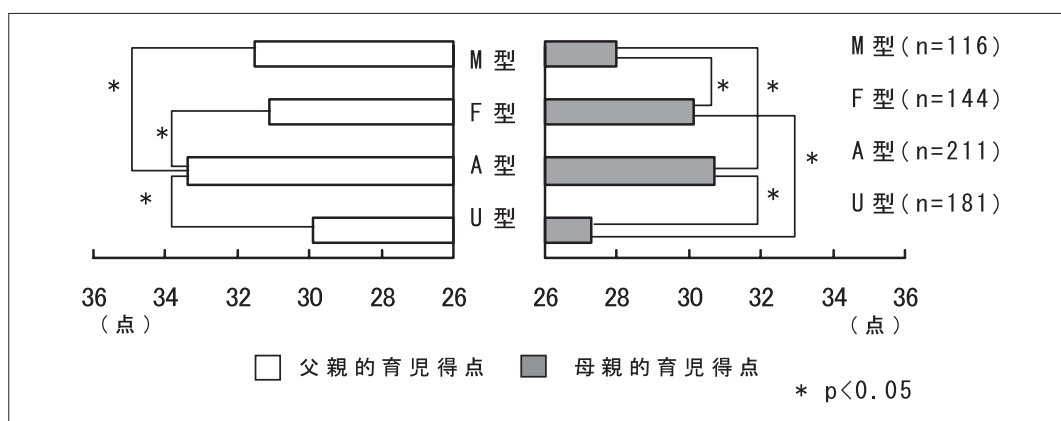


図7. 男性のジェンダー・タイプ別育児得点

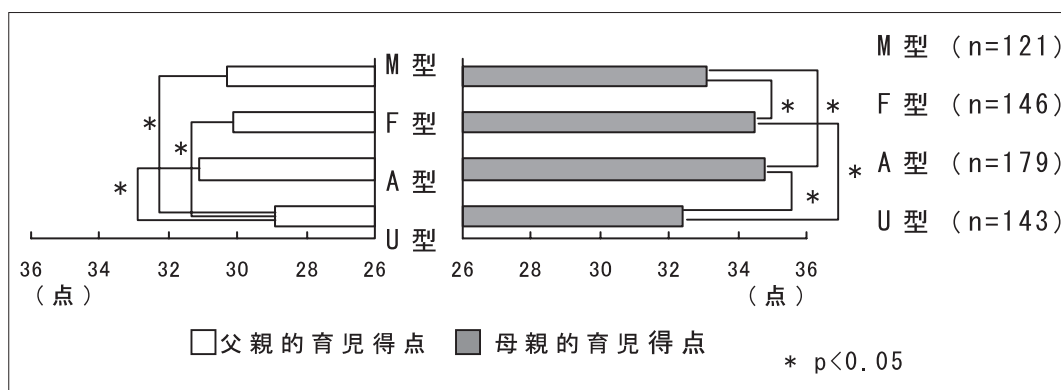


図8. 女性のジェンダー・タイプ別育児得点

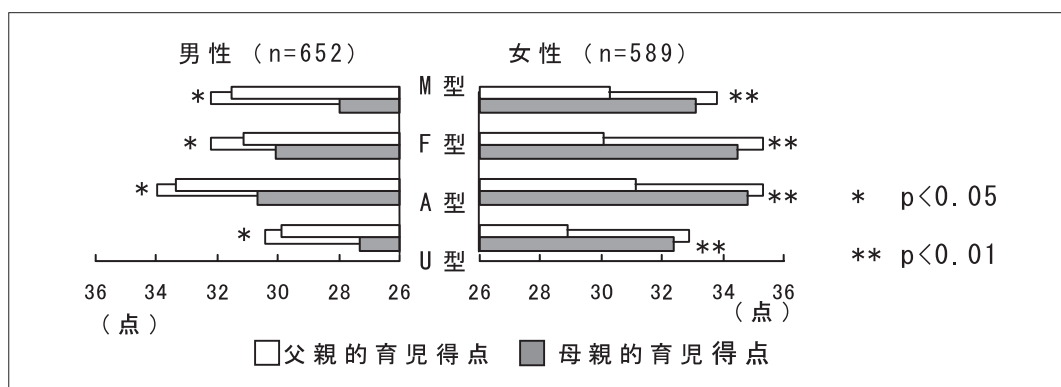


図9. ジェンダー・タイプ別父親的育児得点と母親的育児得点の比較

母親的育児得点の平均は 33.7 ± 1.4 点であった。医学系の父親的育児得点の平均は 31.3 ± 0.5 点、母親的育児得点の平均は 28.9 ± 0.5 点であった。その他医療系における父親的育児得点の平均は 31.4 ± 0.5 点、母親的育児得点の平均は 29.4 ± 0.5 点であった。理系の父親的育児得点の平均は 31.5 ± 0.4 点、母親的育児得点の平均は 28.6 ± 0.4 点であった。文系の父親的育児得点の平均は 32.0 ± 0.3 点、母親的育児得点の平均は 29.2 ± 0.3 点であった。その他の所属における父親的育児得点の平均は 30.2 ± 1.0 点、母親的育児得点の平均は 28.4 ± 0.9 点であった。父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平均を所属で比較すると、父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平均ともにすべての所属で有意差はみられなかった。

(2) 女性の学部別育児得点

看護系の父親的育児得点の平均は 29.6 ± 0.3 点、母親的育児得点の平均は 34.7 ± 0.4 点であった。医学系の父親的育児得点の平均は 31.4 ± 0.8 点、母親的育児得点の平均は 34.4 ± 0.9 点であった。

その他医療系における父親的育児得点の平均は 30.7 ± 0.4 点、母親的育児得点の平均は 34.2 ± 0.4 点であった。理系の父親的育児得点の平均は 29.8 ± 0.8 点、母親的育児得点の平均は 33.5 ± 0.9 点であった。文系の父親的育児得点の平均は 30.0 ± 0.2 点、母親的育児得点の平均は 33.2 ± 0.3 点であった。その他の所属における父親的育児得点の平均は 30.3 ± 0.5 点、母親的育児得点の平均は 33.8 ± 0.7 点であった。父親的育児得点の平均と母親的育児得点の平均を所属で比較すると、父親的育児得点の平均はすべての所属で有意差はみられなかった。母親的育児得点の平均は看護系が文系に比べて有意に高かった ($p < 0.05$)。その他は母親的育児得点に有意差はみられなかった。

5. きょうだい構成の育児得点

男女ともきょうだいの構成が不明なものを除外して検定をおこなった。

(1) 男性のきょうだい構成の育児尺度の得点

きょうだいがいない男性の父親的育児得点の平

表 5. 背景別にみた育児得点 (点)

	男 性		女 性	
	父親的育児得点	母親的育児得点	父親的育児得点	母親的育児得点
性 別	31.6 ± 0.2	29.1 ± 0.2	30.1 ± 0.2	33.8 ± 0.2
ジェンダー・タイプ				
男性性優位型 (M型)	31.5 ± 0.4	28.0 ± 0.5	30.0 ± 0.3	33.1 ± 0.4
女性性優位型 (F型)	31.1 ± 0.4	30.1 ± 0.3	30.1 ± 0.3	34.5 ± 0.3
両性具有型 (A型)	33.4 ± 0.3	30.7 ± 0.3	31.1 ± 0.3	34.8 ± 0.3
未分化型 (U型)	29.9 ± 0.3	27.3 ± 0.4	28.9 ± 0.3	32.4 ± 0.4
所属学部				
看護系	30.3 ± 1.7	33.7 ± 1.4	29.6 ± 0.3	34.7 ± 0.4
医学系	31.3 ± 0.5	28.9 ± 0.5	31.4 ± 0.8	34.4 ± 0.9
その他医療系	31.4 ± 0.5	29.4 ± 0.5	30.7 ± 0.4	34.2 ± 0.4
理系	31.5 ± 0.4	28.6 ± 0.4	29.8 ± 0.8	33.5 ± 0.9
文系	32.0 ± 0.3	29.2 ± 0.3	30.0 ± 0.2	33.2 ± 0.3
その他	30.2 ± 1.0	28.4 ± 0.9	30.3 ± 0.5	33.8 ± 0.7
きょうだい				
いる	31.8 ± 0.2	29.0 ± 0.3	29.4 ± 0.6	32.6 ± 0.6
いない	31.1 ± 0.9	29.7 ± 0.7	30.1 ± 0.2	33.9 ± 0.2

均は 31.1 ± 0.9 点、母親的育児得点の平均は 29.7 ± 0.7 点であった。きょうだいがいる男性の父親的育児得点の平均は 31.8 ± 0.2 点、母親的育児得点の平均は 29.0 ± 0.3 点であった。きょうだいがいない男性ときょうだいがいる男性では父親的育児得点・母親的育児得点に有意差はみられなかった。

(2) 女性のきょうだい構成の育児尺度の得点

きょうだいがいない女性の父親的育児得点の平均は 29.4 ± 0.6 点、母親的育児得点の平均は 32.0 ± 0.6 点であった。きょうだいがいる女性の父親的育児得点の平均は 30.1 ± 0.2 点、母親的育児得点の平均は 33.9 ± 0.2 点であった。きょうだいがいない女性ときょうだいがいる女性では父親的育児得点に有意差はみられなかった。母親的育児得点はきょうだいがいる女性がきょうだいがいない女性に比べて有意に高かった ($p < 0.01$)。

考 察

今回の調査では、男性性得点・女性性得点ともに男性が女性に比べて有意に高かった。この結果について、2つのことが影響していると考えられる。1つはアンドロジニー・スケールの質問項目の特性である。アンドロジニー・スケールの質問項目は、男性性項目は「自主的な」、「積極的な」、女性性項目は「やさしい」、「親切的な」のように肯定的な項目で構成されている。このような肯定的な質問に回答する際には対象の自己評価が大きく影響すると考えられる。土肥の先行研究で、自分の性格など（男性性、女性性、アイデンティティ）を評価する質問項目で男性の得点が女性の得点より高い傾向がみられている⁴⁾。本研究の対象においても男性は女性に比べて自分を高く評価するため男性は女性に比べて男性性得点・女性性得点の両方が高くなったのではないかと考えられる。もう1つは、現代の青年期男性の男性性・女性性である。現代の青年期男性は男性性（男らしさ）が女性と比べて高いだけでなく、女性よりも高い女性性（女らしさ）を身につけている可能性が考えられる。この点については、今後さらに調査・研

究を行わなければならない。

ジェンダー・タイプ別に育児得点の平均を比較すると、男性性と女性性の両方を高く身につけている両性具有型（A型）が、男女ともに父親的育児と母親的育児の両方を行いたいと思っているという結果であった。土肥¹⁾は「男女両性具有人間は考え方が柔軟で、可能性としての行動範囲が広く、状況に応じて最適な行動を効果的に遂行することができ、心理的にも健康であると考えられてきた。一方、これとは反対に性別化（sex-typed）された人間、つまり男性性あるいは女性性のみが強い人間は、彼または彼女の行動を内面化された性役割の基準に一貫させようと動機づけられ、その基準に不適切であると考えられる行動を禁じてしまうと考えられている。」と述べている。本研究の結果においても両性具有型は父親役割・母親役割という区別なく育児を行いたいという柔軟な考えをもっていると考えられた。

所属学部別のジェンダー・タイプや育児観尺度の比較において、看護系に所属する学生は男女ともに母親的育児を志向する傾向があるのではないかという仮説を立てて検討を行った。看護系の女性性は文系の学生に比べて母親的育児得点が高く、看護という学部を選択する際に個人の母親的育児を志向する性質が影響している可能性や、看護学を学ぶ中で母親的育児の志向する性質が強まった可能性が考えられた。男性については今回は看護系の対象者が少なく、仮説のような結果は得られなかった。

きょうだい構成別の比較ではきょうだいがいることがジェンダー・タイプや育児観に影響するという仮説のもとに検討を行った。ジェンダー・タイプではいずれのきょうだい構成においても有意な差はみられなかった。しかし育児観得点ではきょうだいがいる女性は母親的育児得点が高いという結果が得られた。正高¹⁹⁾は母親による高く抑揚の激しい口調（motherese）を「母親語」と訳し、女子大学生を対象とした調査で、きょうだいがいるものほど子どもに接する際に母親語が見られると報告していることと合わせて考えると、きょう

だいと接することが、女性の母親的な部分の形成になんらかの影響を与えている可能性が考えられる。

先行研究と本研究のジェンダー・タイプの割合を比較してみると男性は女性性優位型が増加、女性は男性性優位型が増加していると傾向が見られた。このことから、現代の青年期男女は男性が女らしさを、女性が男らしさを身につけることに許容的になり、物事を性別化して考える傾向が弱くなっているのではないかと考えられた。しかし育児得点の平均を男女で比較すると、男性全体では父親的育児得点が母親的育児得点に比べて有意に高かった。さらに育児得点の平均をジェンダー・タイプ別に比較した結果、男性のすべての型において父親的育児得点が高く、女性のすべての型において母親的育児得点が高かった。物事を性別化して考える傾向が弱いと考えられる本研究の対象において、育児得点が性別化していたことから、育児観は社会的な影響だけでなく生物学的・遺伝的な性の影響を大きく受けるのではないかと考えられた。

今回の調査対象は青年期男女であった。今後は育児観尺度をもちいて再テストによる信頼性の検証や様々な集団を対象にした調査を行い、世代間の比較、育児観に影響する因子の検討を行ってきたい。

結 論

今回の研究で両性具有型は父親的育児得点と母親的育児得点が高かった。両性具有型は父親的育児と母親的育児の両方を行いたいと思っていると考えられた。育児得点は男女別、ジェンダー・タイプ別で比較すると、男性は父親的育児得点が母親的育児得点に比べて有意に高く、女性は母親的育児得点が父親的育児得点に比べて有意に高かった。両性具有型においても男性は父親的育児得点が有意に高く、女性は母親的育児得点が有意に高かった。つまりジェンダー・タイプにとらわれず、男性であるか女性であるかということに育児観は

深く関係していると考えられた。また、生物学的性が個人の育児観に影響している可能性があるという結果は、男性・女性がそれぞれの特性を活かした育児役割が存在する可能性があるということを示唆していると考えられた。

文 献

- 1) 土肥伊都子：男女両性具有に関する研究—アンドロジニー・スケールと性別化得点—。関西学院大学社会学部紀要 57：89-97, 1988
- 2) 土肥伊都子：心理学的男女両性具有性の形成に関する一考察。心理学評論 37(2)：192-203, 1994
- 3) 土肥伊都子：ジェンダーに関する役割評価・自己概念とジェンダー・スキーマ—母性・父性との因果分析を加えて—。社会心理学研究 11(2)：84-93, 1995
- 4) 土肥伊都子：ジェンダーに関する自己概念の研究—男性性・女性性の規定因とその機能—。多賀出版, 1999. p.95-96
- 5) 福富譲：思春期と最近の性役割意識。日本思春期学会20周年記念誌：210-215, 2001
- 6) 舟島なをみ：看護のための人間発達学。医学書院, 1995. p.110-117
- 7) 林道義：父性の復権。中公新書, 1996.
- 8) 林道義：母性の復権。中公新書, 1999.
- 9) 蛭田由美, 寺内文敏, 平山宗弘：父親の子育て支援に関する研究。母性衛生 42(2)：386-393, 2001
- 10) 松本清一：第32回日本母性衛生学会理事長講演—母性と父性。母性衛生 33(1)：5-16, 1992
- 11) 松岡治子, 和田佳子, 花沢成一：青年期男女における親性準備性の性差および母性度・父性度の発達—親性準備性の研究（Ⅰ）—。母性衛生 41(4)：492-499, 2000
- 12) 松岡治子, 和田佳子, 花沢成一：青年期男女における母性度・父性度の発達に関する要因の検討—親性準備性の研究（Ⅱ）—。母性衛生 41(4)：500-505, 2000
- 13) 水上明子, 飯盛穂波：青年期における母娘間の愛着と親準備性について。母性衛生 33(2)：240-246, 1992
- 14) 佐々木正美：母性の喪失, 父性の喪失—児童臨床の現場から—。母子保健情報 36：40-43, 1997
- 15) 汐見稔幸：母性, 父性から親性（おやせい）へ。母子保健情報 36：10-13, 1997
- 16) SANDRA L. BEM：THE MEASUREMENT OF PSYCHOLOGICAL ANDROGYNY. Journal of Consulting and Clinical Psychology 42 (2)：155-162, 1974

- 17) 上田礼子：生涯人間発達学．三輪書店，1997.
p.173
- 18) 内田哲郎：父親の育児？－「父親育児推奨論」
にみる男性の育児参加の理由づけ－．季刊家
庭経済研究 2001春：32-38，2001
- 19) 土肥伊都子：ジェンダーに関する自己概念の
研究－男性性・女性性の規定因とその機能．
多賀書店，1999.
- 20) サンドラ・L. ベム（訳：福富 護）：ジェン
ダーのレンズ－性の不平等と人間性発達．川
島書店，1999.